



TITLE:

<批評・紹介>斯波義信著「宋代江南經濟史の研究」

AUTHOR(S):

中砂, 明德

CITATION:

中砂, 明德. <批評・紹介>斯波義信著「宋代江南經濟史の研究」. 東洋史研究 1989, 48(3): 566-575

ISSUE DATE:

1989-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154290>

RIGHT:

批評・紹介

斯波義信著

宋代江南經濟史の研究

中 砂 明 徳

本書を繙いた時、先ず目につくのが著者の視野、目配りの廣さであることは誰しも異存の無いところだろう。近年、宋代以降の中國社會について、ある地域に焦點を合わせ、時間軸をできる限り長くとして考察した「社會史」研究が海外で次々と公刊されている。著者はそうした國際規模での中國學の動向をいちはやくキャッチし、また的確にその位置づけを行っている。

我々は海外の研究成果について、一部の、既に古典と目されている著作を別にすると、知る所が存外に尠い。從來の斯界の著積の上に立って他を見下ろす、とまでは言わないが、彼我の實證的成果のレベル云々はさて措くとしても、こうした「社會史」研究が輩出する學閥潮流に測定の錘を下ろしてみることには不熱心なように思う。それだけに著者の手際は一層鮮やかに映るのである。

本書は序章の副題「なぜ空間が問われるか」が端的に示しているように、中國社會の歴史的空間を俎上に載せ、まず地域偏差・比較・生態系をめぐる學說整理を行う。そして前篇で宋代長江下流域の經濟景況を大把握にした後、空間を絞り込んで個々の事例を論じ、「亞地域」のケーススタディたる後篇では、時間軸を清末民初

まで延ばし、寧波・紹興の都市・商業・水利の問題を詳細に描き出している。

序章 宋代の社會經濟と地域偏差

一、考察の端緒

端緒と銘打たれているが、著者が食欲なまでに鄰接諸科學の成果を吸収しつつ鍛え上げてきた研究方法論が呈示され、すぐれた學問的鳥瞰圖となっている。

著者が歴史の三要件とする事件史(個人的時間)、動態史(景氣變動史(社會的時間)、構造史(地理的時間))がブローデルの“*événement*”、“*conjoncture*”、“*structure*”にはば重なり合っていることは言うまでもない。「法王」ブローデルの光被たるや絶大なものがあり、アジア史研究に於いても⁽¹⁾チェードリ、⁽²⁾リードらが「インド洋」「東南アジア」世界に「地中海世界」概念の適用を試みている。しかし、これら海洋世界と中國社會は自ら性質を異にする。三要因の絡み合いの中で歴史を把握すること、後二者に重點を置きながら、事件史、物語史的敘述を再構成された文脈の中に改めて着床させること、そうした問題關心をこそ共有していると言うべきだろう。

著者の據る空間設定はスキナーが提唱した「大地域」(macro region)である。この区分は少なくとも海外の研究者の間では共通の前提となっているらしい。ここ二、三年の間に刊行されたチャフイーの科舉制研究、⁽³⁾イーストマンの明清以降を通觀した研究や、⁽⁴⁾ナカン・ロウスキ共著の十八世紀社會史といった空間を考察の對象に据えた研究を見ると、必ずと言ってよい程、河川域を目安とした八

大區分を意識し、若干の修訂を行いながらもこれを前提としてゐる。

このうち本書の主たる対象は「長江下流域」——江蘇・安徽兩省の南半と浙江省北半——である。この「大地域」では唐代半ば以降、所謂「工學的適應」（土木的改良）と「農學的對應」（品種の選擇等）が積み重ねられ、次第に支谷・扇狀地↓上部デルター↓下部デルタへと定住・農業の核心域が移行していった。そうした變化は交通・都市・市場といった生態系を構成する諸要因にも當然影響を及ぼさずにはおかぬ。著者は高谷好一氏のチャオブラヤー川流域の研究に據りながら、スキナーの地文地域論に於いては潜在與件とそれがちな「核心域」「中樞點」の生成過程を動態的に捉えようとする。

二、宋代社會と長江下流域

全體的な歴史敘述と長江下流域独自の周期的循環、全國的レベルとミドルレベルの間のずれと接合點を見出すべく七期の區分が試みられる。

まず宋初から仁宗期を第一期とし、更に吳越國平定を以て中仕切りを立てる。吳越國のフロンティア開發の後を承けた宋朝は江南の農業振興、品種改良に力を入れる一方、年上供米六百萬石の原額を定立して「輕稅」に据え置き、「邊餉のための内地コロニー」を育成した。

第二期は慶曆改革を含み込む時期で、財政の窮迫から田制・稅制の見直しが計られ、全國的な水利興修の中で、長江下流域も上昇への始動に入る。王安石新法から北宋滅亡に至る第三期はこの地域に

安定した耕地が大量に賣され、全國の中でその比重が一層高められた上、昇期である。同時に、それまでどちらかと言えば野放し状態にあった大姓の土地包占に漸く監視の眼が向けられ、保甲・方田・限田といった法網がかぶせられるようになった。

開禧北伐を分水嶺として南宋は二期に分けられる。第四期は混亂から立ち直った政府が經界法、水利改修を推進したものの、むしろ勢豪による湖田・圍田經營によって特徴づけられる實質的成長期であるのに對し、第五期は制度枠組の動搖の中で社會經濟が下降に向い、戰火と臨安の首都地位喪失がこれに追い討ちをかける。第六期の元朝では下降が明らかであり、明朝成立の第七期をまって漸く上昇始動期に入る。

王朝史を彩る様々な事件、新法・經界・和羅・公田といった制度、そして長江下流域の經濟の周期變動を包括的に敘述しようとしたこの時期區分論を著者は暫定的なものと斷わっているが、これは本書の脊梁部分を成している。その檢證は前篇にまたねばならぬ。

前篇 宋代長江下流域の經濟景況

一、宋代長江下流域の生産性

上記の時期區分に則って、畝當り稻米生産性、戸數、それらにかけられる財政壓力の推移が數量化した形で示される。

畝當り收量そのものを示す史料はそれ程數多くないので、誤差はやむを得ないと斷った上で租額の倍數（租率を十分の五として）が補助資料として使われる。著者の設定した空間區分（宋代の府州を山地・平地比率によって區分したもの。豫めコアとベリフエリが設

定されるのでは、動態的な把握志向と矛盾する點が無くもないが、史料の性質からいって已むを得ないのだろう。但し、兩者の臨界線、サブジョンの根據は必ずしも示されていない）のうちコア域には畝收三石以上の事例が見られる。然し、その中樞、蘇州に於てすら内部偏差は著しく、新田の生産性は低い。ペリフェリ域の淮南、長江沿流は史料上、屯・營田の記事が主である爲、その數値には開荒優遇措置を勘案しなければならないものの、その低生産性は覆い隠しようもない。時期による有爲差はコア・ペリフェリいずれに於ても認められない。

これに對し、戸數、人口密度には地域、時期による變動がはっきりと確かめられる。吳越併合當時、コア・ペリフェリとも人口密度は低水準に止まり、兩者の落差も微少であったが、やがて上部デルタで急上昇が起こる。

第二、三期は兩者共に成長期であるが、特にコアの核心域、下部デルタの蘇州が爆發的な伸びを示す。第四、五期はコアが急成長を続ける一方、ペリフェリは定率成長に止まるか減速傾向を示す。元、明初にかけては杭州が急落するほか、率ね減少に轉じ、その中で蘇州のみが減速しながらも成長し続ける⁽⁶⁾。

次にこれらにかかる財政壓力―秋苗額をみると、方田・經界といった法網が張りめぐらされたにも拘らず、宋一代を通じて靜的な停滞を示していると言える。杭州遷都、官兵駐在による穀物需要の急騰にかかわりなく、「原額主義」の財政枠組は殆んど變化しない。

政府は商税の増加、加耗の徴收、留州部分の削減等の彌縫策、和糶による糧穀の補填で對症療法に努める。漸く、モンゴル防衛による財政壓力の増大が、「輕徭薄賦」の放棄、公田法の施行に踏み切ら

せ、これが元、明に受け継がれていく。

以上を總合して著者は第一期のフロンティア性、第二、三期の蘇州低地デルタの「急成長」、行政經費の増大をにらみつつ、成長を捕捉しようとした諸法、第四期の遷都が一大刺激となって生じたコアとペリフェリの格差増大、第五期の流通財に偏した過重な財政壓と硬直した税制による自壞作用を結論として引き出している。

長江下流域の生産性の數量化といえ、先行して發表された宮澤知之氏の「宋代先進地帯の階層構成」(『鷹陵史學』一〇、一九八五)が参照されねばならない。扱う空間の廣狹、區分の設定の仕方の違いは當然として、より對照的なのは、著者が戸數、人口密度を重視する(スキナーの視點の繼承と思われる)のに對し、宮澤氏は土地所有額を勘案している所である。蘇州の新田(易田、三易田の廣汎な存在)の低生産性は兩者の共に指摘する所だが、戸口増による急成長か、土地の細分化か、力點の置きどころが少しく異なる。「宋代の先進地帯」をめぐるのは近年稻作のアジア史規模での見直しが提唱され、今後も議論が深められてゆくだろうが、著者も指摘している包占現象の對極において進行している所有の細分化現象の中で、「成長」の内容を吟味する必要がある。著者自身の言葉を借りれば「大土地所有の正負の効果」が測定されねばならない。

また、ここで強調されている財政枠組の生産性への壓力の問題は農業史と制度史の重要な接點だが、その検討は第三章に委ねられている。

二、長江下流域の水利組織

前章の問題に未だ検討の餘地が残されているのに對し、本章のテ

「マ」に關しては『江南文化開發史』を初めとして、『中國水利史研究』等に於て着實に事例研究が進められてきている。

著者は高谷氏のモデルに據つてこれらの著横に整序を與えた。二〇四—一七頁の水利工事表を扇狀地、上部デルタ、下部デルタごとに分類した一七八頁の表²がその成果である。これによつて佐藤武敏、青山定雄兩氏の研究と共に、江南水利研究の基礎文獻が出揃った感がある。この後の個別的な事例研究で意識されている維持組織、施行主體、そしてその記録、編纂者の認識レベルの問題を、限定された史料の中で、時期的變遷に即して總體的に考察し、明清期と較量することが今後の課題とならう。

三、長江下流域の市糶問題

宋代税制の基調をなしていると著者の強調する輕税率通則と原額主義のために、財政が硬直をきたした。これを彌縫するのが市糶の活用である。本章は從來個別的に取り扱われる傾向にあった市糶の問題を通觀することによつて、第一章でとりあげた財政壓力の推移を考えようとしたものである。

北宋期の東南漕米六百萬石の數は京師の消費量にほぼ見合つた數であり、河北・河東・陝西三路糧草の七割は市糶に仰がねばならなかった。然し、取引の濫發は商人の價格操作を招いたため、政府は「見錢主義」によつて市糶の主導權を取り戻し、農民の生産餘剰の直接的吸收を計つた。さらに末年の多難によつて「均糶・勸糶」といつた、より一層直接的な強制手段が取られ、長江下流域もその中に捲き込まれるに至つた。

南宋では秋苗上供原額と實徵額の間に百三十萬石以上の開きがあ

つたので(百萬石の減額プラス折錢分の三十五萬石)、この分を和糶によつて補填する必要があつた。この額が兩浙七十六萬、三總領所計四十六萬五千石という形で割りふられていたが、軍事費膨脹のため六百萬、買似道の時代には八百萬石に達した。それに伴ひ、「置場收糶」から直接的な一率賦課の「科糶」へと轉じ、中小戸を窮迫に追い込み、湖南、江西の小州に過重な負擔を強いた。

著者は公田法發布の背景を整理し、末尾に市糶の史料を地域毎に分類した附表を掲げる。先行業績との重複を避け、江南とのかかわりを考える上で、記述の重點は南宋にある。南宋の地方官が任地の財政と市糶の關係を精細に論じた文章は數多く、この問題は財政史を解く一つの鍵となる。その結果、浮彫りにされたのは一章で述べられた經濟景況と財政のズレである。

政策史の祖述に甘んじることなく、經濟の動きと財政のズレ(成長)の捉え方次第でその中味もかわってくるが(を構造として把える視點は重要である。然し、附表に示された史料はまだ羅列的で、中央・地方レヴェルの切り分け、相互連關の解明が課題として残されている)。

四、都市化の局面と事例

農業經濟と共に本書の柱となっている都市化の問題が検討される。都市化の一般的局面について城周規模のデータを分析考察した第一節と、首都杭州の復原を軸として中國都市の複合的性格の抽出を試みた第二、三節から成る。

先ず、章有道の清末都市の形態研究を意識しつつ、城周・門數・城濠等のデータが蒐集される。その中心は『永樂大典』に史料を多

く残す江西である。これらのデータを、上位（路治以上）、中位（府州軍治）、下位（縣治）治所に分け、スキナーの治所區分を宋に合わせてアレنجしたものの、華北・華南と華中に於て對比する。そして行政ランクと城周規模が對應し合っている―行政と經濟の對應―華中に都市化の合理性を見出す。

都市の複合的機能を考える時、城郭規模の大小の捉え方は複雑なものにならざるを得ないが、著者は敢えて一つの方向性を打ち出し、史料の關係上國都に關心が集中せざるを得ない都市研究に風穴を開けようとする。

唯、著者自身「過渡的概括」と斷っているようにデータが未だ整理されていない。推論に大きな變化が出るわけではないが、洪州の城周倍增（唐元和の韋丹による）が見逃されていたり、永州について洪武期の増廣の數字を掲げたり、桂州と潭州の城周を混同（『可齋續叢後集』卷五によれば、桂州六里、潭州二十五里）する？などのミスもある。第二、三節の完成度と對照的だが、これは從來の研究状況をそのまま映し出していると言える。擴張の時期的問題なども含め、著者も言われるように「將來の總合」にまつ所が大きい。

第二節では人口百五十萬（臨安の人口については「南宋臨安の人口再說」待兼山論叢七、一九七四などで著者が早くから注意している）の内、官・胥・軍が約三分の二を占める首都を單純に官吏都市と規定するのでなく、その供給（官府の供給能力は一四％に過ぎない）を支える重層の市場圈組織の分析の必要性が説かれる。

組織の中樞をなす「經濟ゾーン」とこれに近接して供給を仰ぐ「官紳ゾーン」、さらに「文化・宗教ゾーン」の設定、諸機能の分析は第三節で行われる。著者はこれを單なる特殊事例に押し込め

ず、都市論全體の中に位置づけようとする。傳統的ノルムと現實主義のせめぎ合い、諸機能・各ゾーンの複合體として都市を捉える視點は前掲の韋氏らの立場と共通しており、都市情景の精細な描寫と直觀的、一義的なレットル貼りの兩極に引き裂かれた感のある研究状況の中で今後も深められるべきであらう。

五、局地的事例

長江下流域からは湖州、徽州、更に中流域から江西の袁州、湖北の漢陽軍の事例をそれぞれとりあげ、定住と開發、水利の沿革、人士の途徑、地方官の荒政など宋代の地域社會の多面的敘述が試みられている。

・湖州

山地と低地の兩様の地文を擁する湖州は既に確認した定住の低濕地擴大のモデルケースであり、その定住擴張と行政の區分設定の乖離―自然村と郷里制―が強調される。また、次の徽州の検討にも言えることだが、著者は進士の地域的分布に留意し、『成化湖州府志』卷九（『嘉靖湖州府志』卷五の誤り？）所載の宋一代の登第者五二二名の五六％が低地の歸安縣に集中していることを指摘している。地域社會に於けるメリトクラシーの形成に意を用いた點は、後に前掲チャフィーの研究によって全國規模で検討されることになった。それによると湖州の進士が南宋に於ては伸びを缺くこと、解試↓省試ルート以外の特別試出身者の割合が高いことが読みとれる。これは蘇州型に近く、低地への集中と共に勢豪の存在を示していると思われる（趙氏宗室進士の多さ）。

なお、著者はモデルケースとしての湖州をとりわけ重視し、本書

收録のものほかに、「宋代の湖州における鎮市の發展」（榎博士選曆記念東洋史論叢、一九七五）などの論考がある。

・徽州

「山多田少」——山村型の低生産地、徽州がとりわけ注視を浴びるのは明以降であるが、この新安商人の搖籃の地の原型が宋代に於てとり出される。徽州は史料的にユニークなところで、名族志・族譜が數多く殘され、『新安志』に於ても地域の發展が汪氏その他の大族の發展と重ね合わせて描かれている。開發の鼻祖汪華は隋末の一群雄で、やがて廟祀されて地域神となつてゆく。著者には「中國の祭祀共同體」（社會經濟史學四四—四、一九七八）という學界展望もあり、恐らく徽州のこうした特徴も著者の關心の引き金となつたのではないかと推測される。

この汪氏を中心として唐以降組織的な開發、勞働集約化が進んだにも拘らず、地形のハンデのために産業の特化、商業志向が生じた過程、致富へ向けられたエネルギーが登科に振り向けられる様子が描き出される。商、宦への志向と言へば、福・建・溫・興化軍が名高いが、徽州はそれ程ではなく（福・建には一回に八千—一萬の受験者が殺到したのに對し、『弘治徽州府志』卷六によれば、徽州の解試受験者は年千二百人程度）、江南でとりたてて目立った數字ではないが、進士の内譯に特色が見られる。六朝來の大族の優勢がそれである。ここに著者は、開發をリードした諸族に於て小宗分立が進行しながらも、なお族的結合が鞏固に保たれている證據を見出す。登科者を出すための族的戰略に注目するのである。

族的結合の「強度」という概念はデリケートな操作を必要とする。例えば、進士を最も多く出した汪氏の族譜（『休寧西門汪氏族

譜』等）をみると、かなり頻繁な移住、分宗が見られる。これを繋ぐ絆をどう評價するかはハイムズ^⑩等地域エリート研究の盛んな米國でも争點となつており、今後議論が益々深まるだらう。

・袁州

萬曆重修「袁州府志」に殘された宋寶慶年間の「李渠志」を手掛りに、水利の安定と居住環境の改良へ向けての營爲が敘述される。

「李渠志」の特徴はその維持組織を詳細に傳えている點にあり、渠長（州士十人の合議集團）、甲戸（食利市民）、陂戸（受益農戶）そして役夫クラスの農戶（賃金支給）の分業關係が記されている。

著者は渠長の合議制に「都市參事會」の萌芽を見出し出しているが、これは後世の郷紳と都市管理の問題を念頭に置いてのことである。郷紳の捐資が眞に實現するのは清代をまたねばならなかったが、その方向性は既に打ち出されていたのである。

・漢陽軍

ここでは地方官サイドの地域管理が語られる。師朱子の風を承けて地域行政に手腕を揮つた黃榦が嘉定年間に當地に着任して、荒政に當つた際の史料がまとまつた形で殘されている。史料の制約もあつて、地域行政と言うと水利改修に話題が集中しがちだが、秋苗負擔額、鄉村組織、住民の生産形態、戸口分布、流通に對する黃榦の言及を再編成して、問題が多角的に扱えられる。黃榦の非凡が恰好の史料を提供したわけで、これだけの密度で事例研究をする途は狭いのもかもしれない。

然し、地方行政の實態、腐敗とは別に、行政がどこまで機能しうるかを見究める作業は必要で、その點本節は一つのモデルとなる。

以上の事例研究は個々に成り立ちも異なり、地域的にも多様であるが、宋代の地域社會をそれぞれの個別特殊性に即しつつ、構造として普遍化していく上での重要な視點が殆んど全て含まれていると言つてよいだろう。

後篇 寧紹亞地域の經濟景況

寧波と紹興は、唐の半ばまで一州を構成し、前面に海潮の瀾す沙堆が微高地を形づくり、背面に山地を控えた地形、進士合格率の高さ、人口の稠密とこれを支える市場經濟の發達に共通した特徴が見出される。そして「寧紹幫」が發生した極めて興味深い地域である。特に著者の關心はこの前近代最後列に位置するパロキアルな社會集團が生まれ出る背景に向けられている。

寧波

浙東河によつて杭州と結ばれ、大運河の延長線上に位置づけられたことから、明州の發展が始まる。交通上の地位の高まりにつれて、六朝期には山麓に止まっていた開發が内陸平野部にまで及ぼされたのである。唐代後半以降、地方官の水利改修が史乘にとどめられるようになり、とりわけ王元暉の名は一帯の人々に永く記憶されることになる。また、沿海部の鹽害に對しても北宋中期以降、防海塘の築造が進んでゆく。

然し、寧波を特徴づけるのはやはり交通上の地位によつて齎される産業の分化と都市化現象である。宋の南遷により、首都の外港としての地位を確立し、都市的繁榮が謳歌される。それに對し、後背地農村は當時の技術的制約の下で既に生産力的限界に達していたことが注意される。更に元末の反亂、明の海禁は都市發達にまで停滯

を齎し、宋寶慶から明成化にかけての二百五十年間に市場の數は殆んど變つていない。

ところが、明中期以降、平野の水利再編、沿岸貿易の再起と共に商業化のベースが再加速する。北貨と南貨の集散地、北幫と南幫の會合點となり、成化から嘉靖にかけて七つの定期市が新たに興つている。紳士、富商の影響下に水路が精緻化され、また農村市場網も擴充されて農村經濟は「古典的完成」の域に達したとされ、一方での土地保有の零細化、副業的職業の分化、漁業への専化が述べられる。

次いでウェーバーの「儒教と道教」の種本の一つである中國人學者の慣行調査、『民國鄞縣通志』等によつて、清末の都市内部での職業分化、問屋制、錢莊の組織、漕船業を始めとする各種ギルド、不動産、課税、都市管理、廟祀など多様な側面がとりあげられる。

この中で寧波商人の動向が特筆されている。徽州、漳泉商人との競争によつて發財の才を磨いてきた彼らは錢莊組織を發達させ、上海が開港後、寧波の地位を奪い取ると、逆に上海その他各地へ進出、擴散して成功を収める（著者には「函館華僑資料集成」など一連の在日華僑研究がある）ことは有名である。特にその進出が中國有數の宗族組織の戰略によつて注目される。

その點、本章の附表「寧波鄞縣主要姓氏・來歴・移住・就業資料」は興味を惹く。ただ、残念なことに備考程度の扱いで、それ以上の分析が加えられていない。かなりまとまった史料だけに更に検討が望まれる。

紹興

いずれも詳細な水利史料を軸とした論考である。

まず、明末清初の毛奇齡の『湘湖水利志』と約一世紀後の郷紳、於士通の『湘湖考略』を比較考量し、一代の碩學が湖田侵占に向けて放った鋭い批判の矢と、汪輝祖らの推賞を受けながらも控え目に提示された改良主義的技術論の差のよってきたところが追究される。

湖をめぐる攻防が、攻める側の投獻等の手段によるなくずしの既成事實化、防ぐ側の「均水約束」等の水利記録の刻石、重刊による傳承をからめて描かれ、極めて生彩に富んだ敘述となっている。

ただ、「郷官」の語の定義が些か曖昧で、地方官と解されている所があるのが氣にかかった。「世食爵祿之家」とあるし、毛奇齡自身郷官と記されていることから、この史料に關する限り、郷紳に近い意味ととるべきだろう。

次いでとりあげられるのは蕭山縣の天樂中郷の村民結社が印行した「麻谿改壩爲橋始末記」である。これは紹興地區の大プロジェクト、三江閘組織の完成の陰で廣域水利の犠牲となった麻溪垵外の天樂郷民の苦闘の結晶である。住民たちは公平に水利問題を論じた明末清初の郷紳劉宗周の先蹤を慕いつつ（劉公祠の建立）、自らの手で小規模ながら水利施設をつくり、民國期に四十人村聯合會を成立させ、垵内民の妨害に遭いながら遂に廢壩を勝ち取る。

水利をめぐる、郷紳の動向と住民の力が如何なる形で表れるかを追跡し、「邊地」が一つの統合された地域へと成長していく過程を述べているが、こうして描き出されたイメージを、當該地域を扱ったコールの著作と比べてみると興味深いかもしれない。

* (2) *

Légalité Chine-Europe—中國とヨーロッパの「等價性」—無

論、プロローグは單純に兩世界を類比しているわけではない。兩世界を全體論的につきあわせてみることに、その時の手段が數量化なのである。

本書の試みもそれとは同じ企圖を持っている。傳統的な史料學の偉業の前に踟躕することなく、一步廣野へ踏み出して眺望を切り拓くことが目指されている。そうした意味で本書自體が一つのコンジャンクチュールに當たっていると言えるかもしれない。

本書の出現で、宋代史は各分野に專著を持つに至った。これまた一つの轉機である。そうした時期に際會して、進路を探しあぐねているとの聲もよく耳にする。その點、本書は確實に導きの糸となろうが、但し、著者が驅使する「都市化」(urbanization)等の用語概念に(評者のみの感想かもしれないが)何かしか異和感がつきまとう。その異和感をつきつめていくことが、海外の研究者たちと共通の基盤に立つて議論を深める爲の前提になると思う。

最後に、大著なるが故に已むを得ない史料引用等の問題點を若干指摘して、些かなりとも評者の責を塞ぎたい。

106頁6行、漫塘劉先生文前集 ↓ 卷一、109 ↓ 7、「屯田の兵卒」は削除、111 ↓ 10、房陵勸農文「汝・房民」 ↓ 「汝、房民」、112 ↓ 2、江湖長翁文集卷五 ↓ 六、116 ↓ 12、契齋集「嘉定二年」 ↓ 「四年」、同 ↓ 13、景定建康志卷二 ↓ 三、119 ↓ 4、荊陽 ↓ 荆・揚(皇甫湜の文集による)、140 ↓ 表1、和州畝收量(一一九〇) ↓ 折支分、144 ↓ 40、成化湖州府志卷七 ↓ 八、同 ↓ 44、土戸のみ ↓ 僑客等合わせて一一四二一八、同 ↓ 68、二〇萬 ↓ 三萬、145 ↓ (8)、淳熙新安志卷四 ↓ 一、同 ↓ 60、成化湖州府志卷四 ↓ 八、151 ↓ 60、淳熙嚴州圖經卷二 ↓ 一、219 ↓ 5、于岫 ↓ 頤、240 ↓ 1、錢六〇萬 ↓ 一六〇萬、芻二十七

○萬→三七〇萬、粟及び→粟豆及び、242→3、戊卒二二四七萬→二萬五千、就糧禁軍六萬七〇〇〇→六萬二七〇〇、246→11、金州八萬→一萬、同→17、米一〇石→一七石、247→17、歲費錢二六五〇萬→二六六五萬、248→2、一五六萬→一七六萬、249→13、顧券→雇募、250→表、吉、撫州→吉、信州、252→9、指揮使→指使、253→6、寧宗朝一〇〇萬石→一五〇萬石、同→9、江南→江西、258→67、食貨四〇〇→一→三九一三六、同→74、二五、二六→二八、259→109、水心集卷一、兵總錄→五、兵總論、261→170、三年閏七月二十八日→二年八月三日、十二日、266→表、景定志→嘉定志、269→表、止堂集一→二、鄂州昔、六六〇〇〇餘石→六六〇〇〇、270→表、二七→六七→六、七、271→表、隆興元年江西路一〇萬石→二〇萬、二〇萬貫→四〇萬、赴鄂州、岳州→江州、湖南五萬石→一〇萬、鄂州→郢州、京西赴鄂州→郢州、後村先生大全集七八→八七、274→表、乾道三年五月→正月、275→表、淳熙十三年六月→十月、常州一〇萬石→二萬、276→表、湖州紹興三年米三萬石→二萬、280→表、隆興元年一〇萬石→二〇萬、二〇萬貫→四〇萬、228→表、湖南、會要食貨一四→四一、淳熙元年十二月→二年九月、288→表、至順鎮江志一→二、290→表、奉化、四明志三→一四、慈溪一六、定海一八、昌國二〇、象山二一、291→表、洪州一〇→二→二一、建昌軍內城〇→九→九・一、293→表、寧都→寧都、294→表、方城九→一七→一八、九→二〇→二一、296→表、桂州二五→六、306→14、二萬五五〇四貫→二五萬五四、309→(6)、永樂大典五二〇→一五九九、312→4、沈雍→沈雍之、同→8、深→淵、385→12、成化湖州府志卷八→四、436→4→5、「時に自殺…租課を徴し」→削除、同→16、光→光・黃、438→7、一一八五→四、442→1、「四年の銓考期間を経て」→

「銓考後四年を経て」、443→15、「四〇文に達したが」→これは官の決めた公定價格で市價はもっと高い、447→(9)、勉齋集卷三八→二八、469→3、王元暉→暉、472→3、開慶志卷四→寶慶志卷一三、561→3、清潯→清估疏潯、569→1、地方官→鄉官、同→15、縣官→鄉官

註

- (1) K. N. Chaudhuri: *Trade and Civilization in the Indian Ocean. An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge University Press, 1985.
- (2) A. Reid: *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680* vol 1. *The Lands below the Winds*, Yale University Press, 1988.
- (3) J. W. Chaffee: *The Thorny Gates of Learning in Sung China*, Cambridge University Press, 1985.
- (4) L. E. Eastman: *Family, Field, and Ancestors. Continuity and Change in China's Social and Economic History, 1550-1949*. Oxford University Press, 1988.
- (5) S. Naquin and E. S. Rawski: *Chinese Society in the Eighteenth Century*, Yale University Press, 1987.
- (6) 『大明會典』には嘉興府の數字が載せられていないので、人口密度のグラフからもはずされてしまっているが、例えば萬曆「嘉興府志」に洪武初の戸數三二七五三二を載せており、統計年は違うものの松江府の數字と合わせてみたものを參考として掲げておいてもよいのではないかと思う。

- (7) 『新唐書』地理志に見える農業水利記事 唐代水利史研究の「一」(『中國水利史研究』1、1965)。
 - (8) 「唐代の水利工事」(上)(下)(『東方學報』東京151、1944)。
 - (9) Sen-Dou Chang: "The Morphology of Walled Capitals", G. W. Skinner ed. *The City in Late Imperial China*, Stanford University Press, 1977.
 - (10) R. Hymes: *Statesman and Gentleman, The Elite of Fuchow, Chang-Hsi, in Northern and Southern Sung*, Cambridge University Press, 1986.
 - (11) J. H. Cole: *Shaohsing: Competition and Cooperation in Nineteenth-Century China*, The University of Arizona Press, 1986.
 - (12) F. Braudel: *Civilisation Matérielle, Économie et Capitalisme, XVe—XVIII Siècle* tome 1, Les Structures du Quotidien, Librairie Armand Colin, 1979.
- 一九八八年三月 東京 汲古書院
六三七頁 二一、〇〇〇圓

五四運動の研究 第四回

③救國十人團運動の研究

小野 信爾

横山 宏章

本論文(書)は京都大學人文科學研究所共同研究報告『五四運動の研究』第四回第十三分冊である。一連の秀作を発表している『五四運動の研究』については、今更紹介する必要もあるまい。

1、實事求是の精神で研究

五四運動は、複雑で多様な側面を内包した運動である。小野教授は五四運動の多様な側面のなかでも、特に大衆運動の側面に多大な関心をもってこれまでも多くの論文を発表している。本論もその一環である。なぜ救國十人團運動を研究対象にとりあげたか。

五四運動が展開されていた當時は救國十人團の活動が非常に注目されていた。ところがその後の中國共產黨の歴史解釋のなかでは、極めて無視されているという現実がある。その原因を次のように指摘している。「中國革命の勝利とはとくに顯彰するには値しないか、そこでの運動を擔った人びとはとくに顯彰するには値しないか、あるいは顯彰することが好ましくない人びとであったのではなからうか」。

たしかに五四運動の直後に中國共產黨が誕生し、その初期メンバーの多くは五四運動に對して陰に陽に關係していた。だから彼等が關係していた運動が、當時の客觀的な役割とは離れて、主觀的に高